

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Marie de France, La Vie Sainte Audree について
Author(s)	原野, 昇
Citation	広島大学フランス文学研究 , 41 : 43 - 49
Issue Date	2023-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/54931
URL	https://doi.org/10.15027/54931
Right	
Relation	



Marie de France, *La Vie Sainte Audree* について

原野 昇

0 文学辞典の記述

日本フランス語フランス文学会編『フランス文学辞典』(1974)の記述のなかに、『短詩』、『寓話詩』(別名『イズペ』)、『聖パトリスの煉獄』の3つがマリ・ド・フランスの作品として挙げられている。しかしそこにはここに取り上げる『聖女オドレーの生涯』は挙げられていない。

実は少し前までは、『聖女オドレーの生涯』という作品の作者がマリ・ド・フランスだと認められてはいなかった。しかし最近では、マリ・ド・フランスの作品にほぼ間違いないであろうとされている。

1 中世の女流作家

前述の『フランス文学辞典』の出だしの部分に注目すると、そこには「フランス文学最古の女流作家」と書かれている。同じく中世の作家 *Chrétien de Troyes* について見てみると、12世紀の「詩人」と書かれていて「男性詩人」とは書いてない。他の男性作家についても同様である。

なぜだろうか。それは、説明する人は、フランス中世においては「作家・詩人＝男性」あるいは「作家・詩人の大多数は男性」という考えがあるからではないだろうか。

とは言うものの、フランス中世において、「女流作家」の数は非常に少ないので、説明の中で「女流」とか「女性」であることを記述することは理解できる。

「女流作家」という記述は実は中世の作家のみでなく、たとえば *Simone de Beauvoir* の項でも「女流作家」という記述が見られる。

現今ジェンダーの問題がよく話題にされ、「男性／女性」という性別に言及すること自体に異をとねえる人もいるかも知れないが、ここではフランス中世における男性の活躍ぶり、女性の活躍ぶり、特に知的分野における女性の活躍がどのようなものであったのかを頭に入れつつ、マリ・ド・フランスについて、特に今までマリ・ド・フランス作とされてなかった作品

La Vie Sainte Audree の紹介を含めてみていきたい。

2 マリ・ド・フランスの生涯

マリ・ド・フランスの生涯について詳しいことは分かっていない。マリ・ド・フランスという名前も、『寓話集』のエピローグに「わが名はマリ、フランスの生まれ（出身）」と書かれているところから、16世紀の歴史家クロード・フォーシェがこの作者を「マリ・ド・フランス」と呼んだのが始まりであり、その呼称が今日まで受け継がれているにすぎない。

ここでいう「フランス」というのは、パリを中心とした「イール・ド・フランス」地方を指している。

作品はフランス語で著わされており、献呈先として記されている名前などから、マリ・ド・フランスはイングランド国王アンリ2世の宮廷と深い関わりがあったと推定されている。

『聖パトリックの煉獄』を翻案しているところから、ラテン語を解しただけでなく、広く古典文学一般に精通していたことが作品の随所の表現から読み取れる。また『寓話集』は、ラテン語からアルフレッド王が英語に訳したものをフランス語に翻訳したと書いており、そのような英語版は見つかっていないが、英語が堪能だったとみてよいであろう。

マリ・ド・フランスの実像について、歴史上のしかじかの女性が該当するのではないかと、いくつもの仮説が提案されてきた。たとえば、マリ・ド・ムーラン説（1151頃～1215頃、アーバン・ホームズほかの主張）、レディング女子修道院長のマリ説（エジオ・レヴィほか）、シャフツベリ女子修道院長のマリア・オステリ説（ジョン＝チャールズ・フォックスほか）、ブーローニュ伯夫人マリ・ド・ブロワ説（アントワネット・クナプトンほか）などである。

しかし、決定的に同定されている女性はいなくて、マリ・ド・フランスの実像は謎に包まれたままである。（マリ・ベケット説については後述）

(1) アンリ2世の宮廷の歴史的・文化的背景

1066年のウイリアム征服王（ギヨーム1世）によるイングランド征服とノルマン朝の樹立からおよそ90年後、イングランド王位についたアンリ2世（1133-1189、在位1150-89）は、父方（アンジュー伯ジョフロワ4世）と母方（イング

ランド王ヘンリー1世の王女、神聖ローマ帝国皇后マティルダ)の相続に加えて、アリエノール・ダキテーヌとの婚姻に伴う広大な所領を併せ、ピレネーから南フランスとイングランドにまたがるアンジュー帝国を築きあげ、プランタジュネット王朝を名乗ってフランス・カペー王朝のルイ7世に対抗するに至る。しかしながら、領土的にはフランス王朝をはるかにしのぐとはいえず、王位の歴史、由緒については引け目を感じないではなかった。

アンリ2世の宮廷では多数の言語、精神性が混在していたとされる。主なものは北のフランス人、南フランスのオクシタン人、サクソン人、ケルト人(ウエールズ、スコットランド、アイルランド、フランス・ブルターニュの)の4つの言語・文化であった。

そうした状況下で、アンリ2世は長い歴史をもつフランスの王朝に対抗し、イングランド王位の権威を高めるために、ヴァースとブノワ・ド・サント＝モールの2人を歴史編纂官に任命して著述の業に当たさせた。ヴァースは『ブリュ物語』(1155年)と『ルー物語』(1160-74年頃)を、ブノワ・ド・サント＝モールは『ノルマンディ公年代記』(1175年)を著わした。いずれもフランス語(アングロ・ノルマン語)で記されている。『ブリュ物語』では、ブルトン人の祖先はエネアスの曾孫ブルトゥスだとし、プランタジュネット王朝の起源がトロイまで遡ると説いているが、これは元になったジェフリ・オブ・モンマスの『ブリタニア列王史』(1135-38年頃、ラテン語)の記述を踏襲したものである。イングランド王位は、かくして古代地中海世界の末裔として位置づけられたのである。

イングランドの知的雰囲気にはフランスに対する対抗意識と併行して、大陸の王朝のフランス文化に対する敬意、賞賛の念、フランス文化そのものへの帰属意識もあった。言語について言えば、ラテン語の理解がごく一部の知識階級に限られていたので、上流階級のより多くの人々を対象とした著述には、英語ではなくフランス語が用いられた。アンリ2世の宮廷のみでなく、カンタベリーをはじめとする各地の修道院においても同様で、フランス語による聖人伝が相次いだのもその現れである。たとえばバーキング女子修道院における『聖女カトリーヌ伝』、『聖エドワール伝』、『聖女オドレー伝』の3作品は、いずれもラテン語作品からの翻案である。

このようなアンリ2世の宮廷の文化的雰囲気について、もう一つ欠かせない

のは王妃・アリエノール・ダキテーヌの存在である。

トルバドゥール（南仏抒情詩人）としても有名なアキテーヌ公ギヨーム 9 世の孫であるアリエノール・ダキテーヌ（1122-1204）は、15 歳でルイ 7 世と結婚し、フランス王妃となったが、離婚しノルマンディ公アンリと再婚（1152）、アンリがイングランド国王になったためイングランド王妃となる。政治の面でも大活躍をしたが、文化の面でも、メセナとして詩人たちを庇護し、南仏でトルバドゥールの活躍などで一足早く花開いていた宮廷文化を、北仏、さらにイングランドに広めた。その主な舞台がアンリ 2 世の宮廷であった。

（2）トマ・ベケットの妹？

マリ・ド・フランスはアンリ 2 世の宮廷と関係の深いトマ・ベケットの妹マリ・ベケットである、とカルラ・ロッシは主張している^リ。

トマ・ベケットは 1117 年にロンドンで生まれ、国王アンリ 2 世の大法官となる。さらに 1162 年にはアンリ 2 世の推挙もあって、カンタベリー大司教に任ぜられる。当初は腹心としてアンリ 2 世の治世に協力していたが、大司教になると大法官の職を辞し、教皇に仕える者として教会権力の伸張に尽力、多くの施策において国王アンリ 2 世と対立するようになる。そのような事情から、1170 年 12 月 29 日、国王の意をくむ 4 人の騎士の手にかかってカンタベリー大聖堂内で惨殺される。飛び散った血は信者たちによって持ち帰られた後、殉教者の聖遺物として数多の奇蹟がもたらされるにつれ、トマ・ベケット崇敬はヨーロッパ中に広がっていく。こうしたなか、1173 年には教皇アレクサンドル 3 世のもとで早々と列聖され、聖トマ・ベケットとなる。

トマ・ベケットには 3 人の妹があった。アニェス（1125 年頃生まれ）、ロエズ（1127 年頃生まれ）、マリ（1130 年頃生まれ）である。1164 年、トマ・ベケットは身の危険を感じてフランスに逃れるが、そのとき 3 人の妹を含む家族全員と大勢の側近が行動を共にする。亡命者たちはフランスで厚遇され、パリやシャルトルで学んだ聖職者知識人たちが精神的連帯を表明して周りに集まってきた。ソールズベリーのジョンも真っ先に、イングランドからパリに駆けつけている。トマ・ベケットの 3 人の妹がそのような知的環境を兄と共有していたことは言うまでもない。ちなみにトマ・ベケット兄妹はイングランドで生まれているが、父親はルアン、母親はカーンの出で、共にフランス語が母語であった。

トマ・ベケット暗殺 2 年後の 1173 年、悔恨の情と教皇からの破門処分の懸念から、国王アンリ 2 世はトマの妹マリ・ベケットをバーキング女子大修道院長に任命する。エセックス州（イングランド東部）にあるこの修道院はエティエンス国王以来の庇護を受け、王族や高位貴族階級の奥方、諸侯の寡婦らが多く隠修修道女となっていた。修道院長に任ぜられたとき、マリ・ベケットは寡婦であり、少なくとも 2 人の息子の母親であった。彼女は 1180 年までその任に留まったものと思われる。（同年、アンリ 2 世の非嫡出の娘マチルドが後を襲っている。）

マリ・ド・フランスはトマ・ベケットの妹マリ・ベケットだと結論するためには、大きな難問を解決しなければならない。その第一は、「マリ・ド・フランス」と呼び慣らわされるきっかけとなった「わが名はマリ、フランスの生まれ（出身）」という『寓話集』に見られる叙述である。なぜならば、上記のトマおよびマリ・ベケットの生涯から分かる通り、マリ・ベケットは「フランスの生まれ」でも「フランスの出身」でもないからである。

カルラ・ロッシは、この記述を「装われた身分表明」だと解釈する。種々の状況からして、作者にはそのような装った立場を表明すべき必然性があったとするのである。

3 聖人伝

聖人とは人々の祈りを執り成し、神と人間の仲介としての役割を担う者とされ、中世において、広く崇敬されていた。聖人として崇敬された者の多くが殉教者であり、殉教者を尊び、その遺骸や遺物を崇敬することがなされていた。またそのような殉教の地や、聖人によって病氣治癒などの奇跡が現れた地が聖地として、人々が巡礼して訪れるようになった。

教皇ウルバヌス 2 世は 1095 年クレルモンにおいて、異教徒に占領されているイエルサレムの聖地・聖墳墓教会を取り戻すために、十字軍の遠征を訴えた。これに応じて翌 1096 年 10 万人にも及ぶ民衆が遠征に出発したのである。（第一次十字軍）

そのような聖人崇敬、聖地巡礼の熱狂がフランスじゅうを覆っているという状況が、文学の分野において聖人伝が多数産み出された背景にある。『聖パトリスの煉獄』を発表しているマリ・ド・フランスも聖人伝に興味を持っていても

不思議ではない。

4 *La Vie Seinte Audree* の梗概²⁾

冒頭、短いプロローグ「良き務め・目的のために時間使うべし」に続き、2つの精神的結婚について述べられる。

Tonbert と最初の結婚、彼は彼女に Ely 島を夫の死亡時に権利を与えられる生涯不動産として贈与。

彼の死後、ノーサンブリア王 Egfrid と2度目の結婚。結婚当初は、妻の貞節を尊重し、宗教的生活を送っていたが、やがて夫は実質的夫婦の権利を主張するようになる。彼女は自分の処女性への誓いを破らないために逃亡せざるを得なくなる。彼女は神による数々の奇跡で助けられ、Ely 修道院まで逃れる。彼女はそこで女子修道院長を務めたが、首にできた腫瘍で死ぬ。質素な棺に納められ埋葬された。妹の Seaxburga が女子修道院長を継ぐ。

新院長はオドレーの遺体を白大理石の石棺に移す。その際、彼女の体があらためられ、処女性が証明された。

870年、デーン人の侵略により修道院は破壊され、多くの修道士、修道女が殺された。彼らはオドレーの墓を壊し、中の宝物を盗もうと試みたが、失敗し殺された。

Edred 国王時代に修道院を復興しようと考えた後の修道士たちは、聖女オドレーの記憶に格別の敬意を示さなかった。そして修道院から追われた。

デーン人侵入の1世紀後の Edgar 国王は修道院を再建し、オドレーの遺体を新しい教会の彼女の姉妹たちの墓のそばに再度移した。

次にオドレーの行った奇跡の数々について語られる。彼女は病、盲者、聾啞者、麻痺者を治癒し、悪事をなす者を懲らしめ、肉体を我が物にする悪魔を退け、敵対する者同士を和解させた。

エピローグで、著者は再度自分の仕事の目的を述べ、身分を明かしている。名前を Marie と名乗り、「自分が記憶されるために」(4625行)と書いている。『寓話集』の表現と酷似している。

注

- 1) Carla Rossi, *Marie de France et les érudits de Cantorbéry*, Editions Classiques Garnier, 2009.
- 2) *The Life of Saint Audrey---A text by Marie de France*, Translated and edited by June Hall McCash and Judith Clark Barban, Mc Farland & Company, 2006.